

国際協力特別賞

「こころ」を繋ぐ

学校法人太田国際学園 ぐんま国際アカデミー高等部 11年

石崎 さくら

米軍がばらまいた枯葉剤は甚大な被害をベトナム国民にもたらし、世代を超えて新しく誕生する小さな命にまで、影響を及ぼし続けている。この事実は私の心を大きく揺るがした。ベトナム戦争について学ぶ事と、枯葉剤の影響を受ける子ども達に何か出来る事はないのか考えるため、私は高校1年時の冬休みに3週間ベトナムの特別支援学校でボランティアに参加した。実際に特別支援学校に行ってみると、現状は想像と大きく異なっていた。身体的な障害が多いという事を聞いていたが、実際は狭い施設の中に、精神障害の子ども達が約60人も在籍していた。精神障害も枯葉剤の影響が大きいのだという。その上、この学校では衛生や体罰など数多くの問題があり、どれも深刻であった。そしてこれらの問題の背景には低労働賃金などの施設の経済問題があった。

この学校での体罰とは、昨今、日本で問題になっているような老人や障害者施設での虐待とは異なる。ベトナムでは子どもをしつける際に体罰を使う事は珍しくないと聞いていたのだが、この学校での体罰は私の想像をはるかに超えた悲惨なものであった。精神障害がある子ども達は授業中に突然大声で叫びだしたり、席を立ち教室を自由に歩き始めたりする。そんな時教師は怖い表情で怒鳴り、長い鉄の棒を振りかざし脅した。ほうきで子どもを叩く事もあった。子ども達は怯え、恐怖と不安でいっばいの表情で教師を見ていた。教師が不在になると、子ども達は教師から受けた体罰と同じように、鉄の棒を友達に向けて振りかざしたり、睨んだりするのである。そんな子ども達を見る事が何よりつらかった。体罰が絶えない理由として、体罰がしつけに最も有効だと考えている事に加え、教師の低労働賃金がモチベーション低下の要因の一つだ。支給額は月一円で、ベトナムの平均月収の約半分なのである。体罰でなく、子ども達に善悪を伝えるための有効な方法について考えた。ベトナム語が話せない私は、第一歩として子ども達に英語で注意をした。やんわりとノーと言ってみたり、危険な行動に対しては強くノーと語気を変えてみたりして注意をした。しかし、子ども達はノーという言葉自体を面白がり、怪我に繋がる行動を何度も繰り返した。私はそんな子ども達の反応を見て、子ども達を怒ることは逆効果なのだと気付いた。そこで、どんな場面でもノーと言わず、自分の目線を子ども達の見線の高さまで下げて合わせ、表情で善悪を伝えるようにした。そうしているうちに遊び方を自分から変えようとする児童もいた。この時、体罰よりも、このメッセージを伝えたい！という気持ちを表情で表現したほうが子ども達に伝わるのだと確信したのである。言語や障害、年齢を越えて意思疎通が出来た時の喜びは、今後もわすれる事の出来ない宝物となった。

今回、私はとても多くの大切なことを特別支援学校の子供達から教わった。怒鳴っても、力を利用して子ども達の「こころ」には何もメッセージは伝わらない。また、あなたの「こころ」を理解しようとしているという姿勢を表現することが、どんなに大切に重要であるか。そして視線を合わせることだけでも子ども達とより深い意思交換がはかれることも教わった。

今、私達に出来ること。それは、相手の「こころ」を理解しようとする姿勢と、相手を思いやる気持ちを持つことである。それを伝えるための根気も。70億人もいるこの世界に、自分と同じ価値観や言語、文化を持っている人はほんの一握りだ。しかし、言語や障害、文化や思想は違っても「こころ」と「こころ」を繋ぐ事は出来ることを今回の体験を通して学んだ。一人ひとりが相手を想う「こころ」を持つことで、お互いの理解が深まり世界中で起きている紛争や人権を損なうような数々の問題を解決し、防ぐことが出来るのだと私は今後も伝えていく。